

## 2019. 3. 24. 受難節第3礼拝式説教

聖書：ルカによる福音書13章1-9節

『見守るまなざし』

今日の聖書箇所には悔い改めるという言葉が二度も出てきます。聖書では罪ということが繰り返し語られますから、悔い改める、という言葉もたくさん出てくる、と思っている人もいるかもしれませんが、実際聖書を読んでも、そうでもないのです。もちろん、悔い改めという言葉は要所要所で使われているのですが、ヨハネによる福音書には一度も出てきませんし、パウロのたくさんある手紙の中でも、ホンの数度しか出てきません。ヨハネのことは今置くとしても、パウロは悔い改め、という言葉積極的に使っていません。パウロ自身は、悔い改めという言葉では誤解を生みやすい、と思ったかもしれません。新約聖書の中で比較的好く悔い改めという言葉が登場するのは、今日読んだルカによる福音書とその続編である使徒言行録です。

そのルカ福音書、使徒言行録でも悔い改めという言葉の意味が、わたしたちが使う悔い改めという言葉の意味とはだいぶ違う使われ方をしていることに気づくのです。それはルカに限らない、新約聖書全体でも悔い改めという言葉は、そもそも日本語で言う悔い改めとは違う使われ方をしているのです。悔い改めという言葉は、日本語では普通、自分のあやまち、失敗、考え違いに気づいて、悔いて心を入れかえる、直す、というように、自分の反省、後悔による自分の態度変更です。しかしキリスト教信仰において、問題となるのは、罪の悔い改めですから、それが自分で気づいて、自分で改め、直すことができるものなのか、という根本的な問題があります。

今日の聖書箇所には二つの話が記されています。一つは1節から5節で、最近起きた二つの出来事をめぐっての主イエスの言葉が記されています。最初の出来事は、イスラエルを支配していたローマの総督ピラトがガリラヤ人を逮捕して殺し、その血を自分たちの生贄の獣の血に混ぜた、という事件でした。こうした事件が起こると、必ずと言っていいほど、彼らがそのような無残な死を遂げたのは、彼らの罪が深かったからだ、というような風評が流れる。風評だけでなく、断定する人もいた。そういう人々の声に対して、主イエスは、彼らが災難に遭ったのは、他のガリラヤ人とは違い罪深いものだったからだ、というのでは決してない。あなたがたも悔い改めなければ、みな滅びる、と言われた。もう一つの出来事は、シロアムの塔が倒れるという事故があり、その事故に巻き込まれて死んだ18人の人々がいた、という出来事でした。この

時も全く同じように、事故に巻き込まれた人々は、罪深いから、巻き込まれたのだ、という風評が風のように流れた。主イエスはそれに対しても、まったく同じことを言われた。その人たちが罪深いから、事件に巻き込まれたのではない。あなたがたも悔い改めなければ、みな滅びる。

無残な死を遂げたり、事故に巻き込まれたりしたら、それはその本人が罪深いからだ、という考え方はこの時代に限らず人間の歴史に絶えず見られます。生まれつき目が見えない人と出会ったときに弟子たちは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか、両親ですか、と主イエスに問うたことがあります。弟子たちもそう考えていたということです。病気も障がいも、事故も、何らか因果応報、それも端的に罪の結果なのではないか、と考えることが多かったのです。現代でもこうした捉え方は形を変えて現れてくるのです。重い病気になったり、大きな困難にぶつかった人が、特別に悪いこともしていない自分がなぜこんな目に遭うのか、と問うのも、裏返しの因果応報ともいえるのです。主イエスはこうした罪深いからこういう不幸な目に遭うのだ、というとらえ方を断固として退けられました。それはまちがっている、と言われたのです。そもそも因果応報という原因追求型の考え方を主イエスは大事なことはされなかった。むしろ、もっと大事なこと、根本的なこと、そこに目を向けるよう促された。それは、人間は誰であれ、神の前に一個の罪人なのだ、という事実です。神から離れ、神抜きで自分本位に生きようとする、自分が自分の神になろうとする、そのためには神殺しも辞さない、そういう罪が一人一人の中に、抜きがたくある。だから悔い改めなさい、そうキリストは言われたのです。しかし、そこでこそ、最初に申し上げたように、自分で反省し、自分で心を入れかえて罪人ではない自分になることができるのか、悔い改める、というようなことが自分にできるのかが、問題になるのです。

そこでキリストは一つのたとえ話をされました。それが6節から9節の話です。ある人が葡萄園の中に無花果の木を植えた。そしてその木を育てたのだが、実がならなかった。そこで主人は園丁に「もう三年もの間この無花果の木に実がならない。だから切り倒せ。なぜ土地を塞がせておくのか。」というのです。

すると無花果の木の世話をしてきた園丁は、「ご主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って肥やしをやってみます。そうすれば来年は実がなるかもしれません。もし、それでだめなら、切り倒してください。」

短いたとえ話です。たとえ話の言わんとするところは、はっきりしているように思えます。実がならないのだから、切り倒せ、という葡萄園の主人に対して、尚しばらく待

ってください、という園丁の無花果の木への思いと、忍耐、愛情です。

アクセントは園丁の思いにあるのです。無花果の木は実を結ばない。だから普通なら切ってしまう。それが当たり前。けれど園丁がそれでもなお、このままにしてください。わたしが面倒を見ますから、と言っているのです。

神の前で罪人であるわたしたち。自分ではそのことに気づくことも、その罪に気づいて、反省して、悔いて、心を入れかえて、神の前に神の喜び給う道を、神を愛し、人を愛し、神に従って歩いていくことができないわたしたち。それが実を結ばない無花果であるわたしです。実を結んでいないのです。見つけたためしがない、とまで言われているのですから。

でも、そのわたしのために、このままにしておいてください、と言ってくれる方がいるのです。このままでいいから、これでいいからこのままほったらかしにしておきましょう、と言っているのではない。それでは実はないのです。自分では罪人で自分に気づいて、その自分を悔いて、心入れかえて、神に従うものにはなれない、実を結ばないわたしであるにもかかわらず、このままにしておいてください、と言ってくれる方がいるのです。その方がわたしの面倒をみてくださるのです。その面倒こそ、十字架であります。

とすれば、主イエスがここで悔い改めなければ、と言っておられる意味は、自分の力で反省し、悔いて、心を入れかえるのではなく、実を自分では結べないわたしのために園丁が面倒をみてくださる、ということを受け取って感謝すること以外ではない。わたしがどんなわたしであっても、わたしのために十字架にかかってまで面倒見てくださる方がおられる、いのちを献げてくださるキリストがおられるということを受け取る以外ではない。しかも、もしそれでもだめなら切り倒してください、という言葉も、十字架に重ね合わせて読むなら、切り倒されるのはわたしであるはずなのに、それをキリストはご自身が倒されるものとなって、わたしの罰を担ってくださった。

悔い改めとは、キリストによってわたしはとことん面倒をみていただける、キリストの信実・まことの中にわたしはある、ということを受け取る以外ではないのです。キリストご自身が悔い改めという言葉をもそのような意味で使っておられたことをルカは熟知していたのです。心を入れかえるという普通の日本語の意味でも、悔い改めるということは大変という至難の業ですよ。だがキリストはわたしたちにそういうことを求めておられるのではない。

マルコによる福音書での主イエスの第一声は「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて、福音を信じなさい。」でした。悔い改めて、心を入れかえなさい、ではない。悔い改めて福音を信じなさい。キリストのまことの中にあることを受けとめなさい。

すべてはそこから始まる、ということです。

受難節の日々、わたしたちはキリストが面倒を見ますから、と言ってくださって、十字架にかかっていかれたことを、もう一度確かに受けとめていきたいと思います。

D a t a : 受難節第3主日礼拝説教

讃美：前291、後521

新生教会礼拝堂